RANALD MACDONALD

玉井　武

和蘭語一つを外國との連絡の賴りにして鎖國の夢をむさぼつていた德川幕府を狼狽させたものは、文化五年、(1808) 八月長崎港に突如起つた英吉利軍艦フェイトン號 H.M.S. "PHAETON" の事件[註1]であつた。多數の長崎在住阿蘭陀通詞に英語の素養がなく、ために相互の意志を疏通し得なかつたことを痛感した幕府は、國防上からも英語の修行を重要視する事に方針を一變し、翌文化六年 (1809) には長崎阿蘭陀通詞十四名に「魯西亞語厄利亞文字言語稽古の儀」を命じ、更に其の年の末に至つて「蠻学の儀幼年の頃より不学は氣憶も有之間敷旨に付」[註2]蘭通詞全部に魯英兩國語兼修の命が下り、英語修学の指導に當つたのは、當時和蘭商館勤務のヤン・コック・ブロムホフ Jan Cock Blomhoff であつた。此の結果は和蘭語寄生となつて本邦英学黎明期に一つの障害を產んだが、幸にしてこゝに一大恩人が現れて、毎日の英語教授に綿密な指導を行い、このために通詞達はペルリ來朝の際、神奈川條約締結に大きな貢献をすることが出來た。此の日本英学黎明期の恩人とは即ち Ranald MacDonald で、彼の事績については「人文研究」第一號に於て、既に筆者が觸れたところであるが、本稿はその補足をつとめる覺書である。

RANALD MACDONALD

RANALD MACDONALD

MacDonald (1824—1894) は英國人の父と北米土人 Chinook 族の母との間に生まれ、一八四五年の Oregon Treaty で亞米利加の市民となつた人である。[註3] その年、二十一歳の青年マクドナルドはかねての希望たる日本渡航を斷行することに決し、Captain L.B. Edwards の配下として捕鯨船 Plymouth 號に投じた。一八四八年朝鮮海峽から日本海に入り、鯨群を求めて北上し、船腹を鯨で滿たして歸航の途につく Plymouth 號と北海道の北端で訣別し、船長用のボートに食糧・衣類・航海用具などを積んで永年の夢を實現すべく蝦夷地上陸を企てたのは六月二十七日のことであつた。[註4]

A sailor's feelings are ever warm and true. The companionship of peril forges a masonic bond stronger than the tinsel chain of mere worldly interest. Life for life is the motto of his comrade heart. "Happy to meet; sorry to part," is ever truth with him. I sorrowed for their sorrow, expected not to meet them again!.....With a quivering "God bless you, Mac!" they bade me a long, and, as they thought, a last adieu!

彼は別れの模樣をその手記 "Japan story of Adventure" でこの樣にしるしている。母船と別れた孤舟は七月二日北邊の利尻島に漕ぎ寄せられた。こゝで彼を迎えたのはアイヌの漁師で、最寄りの野束と云う部落に案内し、着換えを與えて手厚くもてなした。然し異國の人を無斷で世話することは當時の國法の堅く禁じて居るところなので、これを宗谷勤番所に屆け、十日后には勤番所から係りの者が取調べのために海上を渡つて野束に到着した。彼等の取扱方が至極穏やかなものであつたことはマクドナルドの次ぎの手記でも明らかである。

Like true Jacks ashore, they were jolly, and, as shown by a present of sweetmeats to myself, were also generous.

今これを日本側記錄によつて確めると、「續通信全覽類輯」には次ぎの如く記されている。

○嘉永元戊申六月廿二日

私領分西蝦夷地リイシリ島之内ノツカと申所へ去る二日申之刻頃異國人壹人橋船へ乘漂着致し濡候衣類を着し居餘程疲候體に見請候に付直樣ノツカ番小屋へ連越食物等手當致し置候段番人共與ソウヤ勤番所へ訴出候に付同所詰家來之内ノツカへ罷越始末相尋候處言語不通に付手眞似を以相尋候へ共異國人も同樣手眞似に而相答候事故事實疑と難相分候へ共沖合に而元船に別れ橋船へ壹人乘漂居候内風波强く相成橋船兩度水船に相成其節所持之磁石海失之樣子にて何れを當と申事なく漂罷在候内高山見請候間漕寄上陸し候趣に相聞候に付乘參候橋船損しも無之候間歸帆可致旨手眞似に而相諭候處右小船に而者大洋歸帆成兼當惑之躰に相見得候に付差留置候旨手眞似に而相諭候處點頭に付ソウヤ勤番所へ引取番人手當等厚く申付置候段勤番家來共より申越候

一、異國人乘參候橋船長サ四間半巾六尺位御座候由右船并船具等役場へ引上置申候其外所持品取調差越候別紙[註4]相添御屆申上候右異國人此上如何相心得可申哉此段奉伺候

以上

六月廿二日　　松前志摩守

RANALD MACDONALD

RANALD MACDONALD

母船 Plymouth 號から扁舟に移り、未知の國 "The mysterious dread Japan" に漂着して先ずうけた取扱が冷遇でなかつたことは日本側の記錄からも想像されるところである。

利尻島から海上を宗谷に護送され、同地に一ケ月余を嚴重な警戒のもとに禁錮生活を送る身となつたが、彼の手記はその間の消息を極めて明るい語調で次ぎの如く傳えて居るのは、マクドナルド本來の性格によるものであろうか。それとも彼の云う "The mysterious dread Japan!" に渡つて、日本が對米・英通商を開いた時に、一流の通詞となろうとする大望のもとには、些細な困難・苦痛はすべて影を沒して了つたのであろうか。長崎護送后の彼の生活などを考えあわせる時、そのいずれもが作用しているようにも思われる。彼はその當時の思出を次ぎの如く綴つて居る。

Being well fed, kindly attended, and amply supplied with all conveniences, with the luxuries of tea and tobacco ad libitum, I had no reason to complain of my quarters.

万里の波濤を越えて遙々北海の孤島を訪れた此の米國青年の處置には、松前藩出先も一方ならぬ心遣いを拂わなければならなかつた。前掲の續通信全覽類輯によれば此の時のいきさつは次ぎの如く記されている。

○戊申七月十一日

志摩守様與御屆被仰上候ソウヤ勤番所へ引取置候異國人之儀松前より同所迄百九拾里餘相隔例年二百十日後者追々海上荒く船路留り候時節相成其上寒地之場所故足輕兩人者マシケへ引取越年仕外勤番御家來共者例年秋來松前表へ引拂候に付百十三里餘には御座候へ共萬一長崎表へ差廻し候様相成候節は江差表へ引取置候へは明早春船路通路出

來可申儀と奉存候可相成儀に御座候はゝ江差表へ引取申度奉存候遠境渡海場之儀に御座候に付取計方奉伺御在所表へ申遣度此段各樣迄奉伺御內慮候

以上

七月十一日

松前志摩守樣御家來

これに對する指圖は十九日附を以て次ぎの如く示されて居る。

○同月十九日御差圖

書面漂着之異國人一旦江差表へ引取置候上都合次第長崎表へ差遣し候樣可仕候事

かくしてマクドナルドは海上護送によつて九月六日松前到着、再び幽囚の生活に入つた。日本語を学び、英語を教え、通譯となる日の準備に全力を傾けたい一心の彼には、まことに悄愴の念やるかたなき日々であつた。ペルリの箱館來航に先立つこと六年、更には蝦夷地に英学の燈火をかゝげるため、遙々松前奉行の招きによつて名村五八郎が津輕の海を渡る八年前であつてみれば、マクドナルドの周圍には英語の理解力のある者は皆無で、質問も皆手眞似で行われたことは既述の通りであるが、松前志摩守を始めとして、警固の武士一同が此の漂着の米國青年に寄せた同情は國境を越えた溫かさのこもつたものであつたことは彼の手記にも知られるのである。

The Governor gave me a present of clothing, Japanese, consisting of four garments.....also a pair

RANALD MACDONALD

RANALD MACDONALD

of Japanese trousers of cotton; two knives, a large and a small one, and a box of confectionery, with a presentation card …… I was also presented with a bed and covering, a large gown thickly padded, and a pillow, varnished, of wood……The Governor kindly made a sign for me to sleep, and said "Noo" —— The Japanese, probably, for snooze …… I slept well, in perfect confidence in my kind host.

マクドナルドは松前に留まる希望を持つて居たが、幕府の指令に從つて彼は長崎表に護送された。同じ年の春米國捕鯨船 Lagoda 號から說走して江良町に漂着した米人十五名[註5]と共に、天神丸に乘じて十月一日松前を離れ、日本海を經て長崎に上陸したのは十月十七日であつた。長崎奉行は親しく遠來の米國青年を取調べるために接見して居るが、手記によるとマクドナルド自身は奉行に對して相當の好感を抱いたものと想像される。

The Governor addressed me a few words, deep toned and low, which though I did not understand them, I took, from the manner and look, not to be unfriendly.

長崎奉行所に於ける取調は宗教に關するものが主だつたらしい。踏繪を出されたが、新教徒のマクドナルドは別に當惑の色も示さず、神を信ずるか否かについては、和蘭通詞森山榮之助の通譯の下に次の如く答えたと彼の手記は記して居る。

One of the questions ——as on a former occasion—— was whether I believed in a God in Heaven. I said Yes! —— Then I was asked what was my belief as to a God in Heaven.

I answered, first, that I believed in One God, and that He was constantly and everywhere present.

Then Murayawa 〔Moriyama〕 —— as if not satisfied with the answer —— asked what I believed in respect to God in Heaven. I answered by beginning to recite The "Apostles' Creed"——in my English prayer book —— having been brought up an Episcopalian —— my father's creed and my own; but when I had said "And in Jesus Christ, his only Son, born of the Virgin Mary"; Murayama suddenly stopped me, saying, quickly, in whisper "that will do! that will do!" He then proceeded to translate my answer, to the Governor, or, at least, so much of it as he thought necessary —— refraining —— I believe —— from any mention of the "Virgin Mary," or "Christ." In that, he was my friend, indeed!

これに對する日本側記錄は至つて簡單に次ぎの如く錄しているに過ぎない。

○戊申九月十五日

一、去る九月五日ノツカ出帆今日松前志摩守家來警固致し長崎表く送越す

北アメリカ洲之内
カナダ
漁師

RANALD MACDONALD

RANALD MACDONALD

ラナルド　マクドナルド

二十四才

右請取之

但神佛者無之唯心意を修し天を拜し候者眞心明悟いたし幸福を可授ために而外に唱す事無之旨

Lagoda號の漂着米人十五人が松前表からマクドナルドと同じ船便で長崎へ護送されたことは既述したところであるが、彼等はマクドナルドとは異り、脫走船員だけに性質も粗暴で、所行も狼籍を極めたものゝようである。[註6] 諫早日記によれば狼籍振りはまことに明瞭で、取扱も容易ならぬものであつたことゝ察せられる。

漂民之者共始末ケ條書

北アメリカ洲漁業船水主共難船いたし候由を以去申年五月七日松前地江小船にて拾五人乘寄同年六月二日蝦夷リイシリ嶋江壹人乘寄いづれも上陸いたし救助相願候付其跡居所捕押差置候處ヂヤンブールラーベマコイ貳人申合便所之屋根を破り逃去候間山中にて捕押居所江差置候處其後チヤンコルテン・ラーベマコイ申合屋根を押破逃候付捕押置右體不法之者共ニ付一同當地江差越候節も右三人ハ船中別圍ニいたし差越候へ共當地ニ着船之節相糺候處全心得違之旨相詑候付后愼方申諭候處堅可相愼旨誠申立別圍より差出一同手廣之居所江差置寐食を安し撫育いたし置紅毛船歸帆之折柄ニ付かひたんよりも心得違いたす間敷旨教諭書翰差遣一同承知之由相答候儀ニ有之候處ラーベマコイ居所之境を破九月廿七日夜逃去候ニ付程なく捕押糺之上前所ニ差置候得ば申口も分類につき寛容之沙汰を以猶又教諭を加へ居所へ一同被差置猶一同之者共江も厚相諭置候處同十一月十八日ヂヤンブール・ラーベマコイ・ボイ三人

居所椽板をひそかに燒切三人一同逃去山中之民家に立越候付直ニ召捕相殘ル者共一同相糺ス處不取留不都合之事而已申立殊度々教諭差加候處前書之通申立ルニ付別圍差出置其後かひたんよりも教示せしむる儀をも不取用度々及不法候上者其餘之者共心底難計彌一同及不法候而者其儘難捨置儀ニ付一同入牢申付置其外病者共藥用手當差加へ撫育いたし置候者とも左之通……[註7]

マクドナルドは Lagoda 號乘組の者とは漂着の目的が異り、蝦夷の土地に上陸して、日本語習学の年月を重ね、機を見て江戸に出向して日米又は日英の貿易關係通詞として活動したい熱望に燃え、渡航の仕度も此の熱望を裏付けるに足る周到さを以てして居る（註4參考）。從つて取調の役人に對する態度から、應答の言葉から、これを日本側から觀るときに、自然 Lagoda 號乘組員とは奇妙なコントラストを呈して居たことは無理からぬ處である。粗暴を極め、脫出を計ること再三再四の十五乘組員にさえ、前述の樣な手厚い心遣いを示して居るのであるから、ましてマクドナルドの場合は云うまでもないことであろう。一應の取調の后、マクドナルドは長崎郊外の崇福寺末寺大悲庵に幽居の生活をしなければならなかつたが、部屋の戸には施錠がされても、心の扉は自由にあいていた樣子が、彼の手記によつてよくうかゞわれる。

I was more kindly treated. I literally had —— as the Governor had promised —— everything I wanted —— except liberty outside. They even gave me up my Bible, and seeing —— as they expressed it —— that 'I made a God of it,' they made a neat shelf …… at a corner of my room, to put it on, as a place of honor.

RANALD MACDONALD

RANALD MACDONALD

蝦夷地の生活に對して彼が感謝の意をこめて、「食糧も充分、配慮も完璧、不自由は更になかつた」と述懐したことであるが、そのことは長崎生活に於ても同樣であつたと云える。一旦取上げられたバイブルも彼の手に戻り、それを恭々しく上げておく立派な棚まで部屋の一偶にしつらえて貰い得たことは、彼が森山榮之助はじめ多數の通詞達を通して如何に長崎奉行所の武士達に考えられて居たかその一斑が想像される。一週に一度は豚肉が食膳につけられ、バター・パン・ミルクがナイフ・フォークなどと共に食卓に置かれたと彼は厚遇[註8]に感謝している。このような樂しさを持つ大悲庵幽閉生活の中で、マクドナルドの味つた今一つの樂しみは和蘭通詞達に對する英語教授であつた。徳川幕府が Phaeton 號の狼籍事件に鑑み、國防上も忽せにすることが出來ないと云う理由もあつて、阿蘭陀通詞に魯・英兩國語の兼修を命じてから既に四十年を經ていた當時ではあるが、和蘭語に依存した爲に英学の習得は健全な發達を極度に阻まれていたことは爭われない事實であつた。今これを北海道關係の事件と併せて考えるに、マクドナルドの利尻漂着の二年前に當る弘化三年（1846）六月四日に、千島擇捉島在住アイヌが米國捕鯨船 Lawrence 號乘組員七名の漂着を發見した。擇捉—松前—幕府と連絡に非常な困難をなめ、日數をかけて、漸く七人の米人船員は、翌弘化四年（1847）五月末日擇捉島を出發し、長崎表到着は八月十九日であつた。長崎奉行平賀信濃守はこれら米人の取調に當つて本木・楢林・森山等五人の和蘭通詞を起用したが、信濃守は通詞の外に出島の和蘭商館々長 Joseph Henri Levyssohn の英語に關する智識にも賴らざるを得なかつたのである。これは和蘭通詞達の持つ英語力では微細な点の吟味に事を欠くと考えたからである。事實、これらの通詞達が漂流米人の名前を日本綴りに改めるに當つてどの樣な發音に直したかは興味ある問題であるが、今その七人の姓名を列記すれば左の通りである。

ジョルズ——George Howe

ピートル——Peter Williams

ヘルリイ——Henry Spencer
モルビイ——Murphy Wells
ベル　　——Bill
ジョー　　——Joe

更に又前記七名の米人が漂着した年の弘化三年(1846)七月、Columbus, Vincennes の二隻を率いて、Commodore Biddle が浦賀沖に來たり、通商を要求した。此の時、幕府の意向を提督に傳達する役は和蘭通詞堀達之助が果したのであるが、旗艦々上で提督に手渡した和文書類に添えて彼が英語で行つた説明は次ぎの如きものであつたと稱せられる。

According to the Japanese laws, the Japanese may not trade, except with the Dutch and Chinese. It won't be allowed that America make a treaty with Japan or trade with her, as the same is not allowed to any other nation. Concerning strange lands, all things are fixed at Nagasacki, out not here in the bay; therefore you must depart as quick as possible, and not come any more in Japan.

從つてマクドナルド自身もこの様な通詞達の手で取調を受けたのであるが、通詞達の上でも最も優秀で、そして彼が最も溫かい心配りを受けた森山榮之助の英語について、マクドナルドは手記の中で次の様に評して居る。

He spoke English pretty fluently, and even grammatically. His pronunciation was peculiar, but it

RANALD MACDONALD

RANALD MACDONALD

was surprisingly in command of combinations of letters and syllables foreign to the Japanese tongue. He was my daily companion —— a lovable one —— ever afterward, during my sojourn in Japan.

ラナルド・マクドナルドの長崎幽閉は、嘉永元年（1848）十月十七日から翌年四月末までの約半年であるが、その間毎日のように森山以下の蘭通詞達が、英語の指導をうけに大悲庵の幽居に集まつた。彼の手記と日本側記錄とを檢すれば彼の膝下に參集して教えを受けた通詞達は次ぎの十四人である。

1. Nish Youtchero（西　與一郎）
2. Wirriamra Saxtuero（植村作七郎）
3. Murayama Yeanoske（森山榮之助）
4. Nish Kataro（西　慶太郎）
5. Akawa Ki Ejuro（小川慶十郎）
6. Shoya Tanasabero（鹽谷種三郎）
7. Nakiama Shoma（中山　兵馬）
8. Enomade Dinosuke（猪俣傳之助）
9. Sujake Tatsuetsuetsero（志筑龍一郎）
10. Hewashe Yasaro（岩瀨彌四郎）
11. Inderego Horn（堀　達之助）

12. Shegie Taganotske (茂鷹之助)
13. Namra Tsenoske (名村常之助)
14. Motoke Sayemon (本木昌左衛門)

In fact, during all my confinement, and nearly daily, Murayama and others were my pupils.

教える者も、教わる者も、共に熱心に勵み勵まされて、彼等の英語は次第に和蘭語寄生の變態から正常な姿に立歸つて來たもの丶如くであるが、弟子側の苦勞もさることゝ乍ら、教師の苦心も一方ではなかつたらしい。今彼の手記をたどつてその教授方法を調べて見る。

Their habit was to read English to me: One at a time. My duty was to correct their pronunciation, and as best as I could in Japanese explain meaning, construction, etc. It was difficult to make them catch some of our sounds especially the consonants, and some of the combinations, particularly, were impracticable to them.

For instance: They cannot pronounce, except very imperfectly, the letter *l*. They pronounce it *r*. So that they rendered my name Ranardo MacDonardo, with a strong burr of the *r*. They also had a habit of adding an *i* (short i) or *o* at the end of a consonant.

RANALD MACDONALD

子音の發音が容易でなかつたことは吾々も想像し得るところであるが、母音については、マクドナルドの云う程立派なものであつたかどうか、少々褒められすぎている樣な氣がする。が兎に角、日本人の母音の發音は些の困難もなく語尾のeさえ立派な發音振りであるとマクドナルドは記している。文法の智識も十分で、了解力も强く、感受性にも富んでいるので、日本人を教える事は樂しみである[註9]——と云つて居るのは彼の僞らざる內心の叫びであろう。彼の長崎滯在は僅か半歲であつたが、Lagoda號の船員とは王子と乞食程の差異ある厚遇をうけ、多數の弟子とは英語を通じて交歡の時を持ち、日本渡航の際の大望は遂げられなかつたが、好印象を抱いて軍艦Preble號に乘つて故國へ歸つたのである。

マクドナルドの長崎に於ける英語教授の概要は前揭の手記によつて明らかであるが、此の十四弟子に對する半歲の指導は眞に貴重なものであつた。通詞達にしてみれば、英語は如何に發音さるべきものかと云うことすらも正しくは知らなかつた。[註10]英語を母國語とする教授者の指導はマクドナルドを以て嚆矢とし、日本の英学はこゝに正しい軌道を與えられたのである。マクドナルドの門下十四通詞は、黎明期の日本英学にとつては眞に貴い先驅者で、その活躍も多方面に亙り、才能も遺憾なく發揮された。嘉永の末、提督ペルリの來航は日本國中を鼎の沸く姿と化し、幕府はために狼狽の極を示して居たが、森山榮之助、堀達之助、名村五八郎等は浦賀表に於ての米艦折衝に通詞として畢生の努力を傾け、神奈川條約の成立に大なる貢献を致したのである。又出版方面の活動を見るに、志筑辰一郎・名村五八郎・猶林榮七郎・中山兵馬・森山榮之助・西吉兵衛は「エゲレス語辭書和解」を著し、堀達之助は「英和對譯袖珍辭書」を編し、英学の振興に一大貢献をして居る。歐米列國と國交を結ぶ時代となり、鎖國の夢を破つて大小を腰にさした武士達が、遣米・遣歐の使節となつて万里の波濤を越えて、遠く異域に修好親善の大使命を果しに赴いたが、その時の通詞としては森山榮之助・名村五八郎が選ばれて居る。名村五八郎・堀達之助の兩通詞は、松前奉行が大英斷

を以て安政三年箱館に開設した英語稽古所に教授役として、本務の通詞の側ら后進を育て、本道英学の燈火を高くかゝげたことは既に人文研究第一輯に於て筆者の指摘した處である。

マクドナルドは憧憬の日本に僅か半歳の生活を許されたのみで、對日通商に米・英側通譯として活躍するという望みは、終に實現する由もなく、Preble 號に乘つて開國直前の日本に訣別を告げ、故國に歸航后は再訪の機会に惠まれることもなく、一八九四年（明治廿七年）八月五日姪の腕に抱かれつゝ、自費出版の目當もつかず、空しく埋もれている「手記」を氣にかけ乍ら、臨終に遺した言葉が

"Sionara, my dear, sionara."

であつたと傳えられて居るが、彼の育てた十四弟子の活動を通じて、彼の熱心な英語教授が美くしい花を咲かせて行つたことを考えるとき、僅か半歳の師弟の契が如何に大きな力を育んだかに今更乍ら驚異の眼を見張らせられると共に、北海道との深い由縁にも思いを馳せらせずには居られない。

註1　文化五年八月十五日早朝、英國軍艦 Phaeton 號（Fleetwood B.R.Pellew 指揮）が和蘭の國旗を立て突然長崎港に侵入碇泊の和蘭船を拿捕する目的であつたが、一隻の蘭船も見えぬので、和蘭人二名を捕え、更に恐嚇して食糧を提供させた、長崎奉行松平圖書頭は諸藩の兵力を要請したが、結局援兵の到着以前に英艦は牛四頭、羊二十一頭、鷄十羽、その外野菜・果實・飲料水等を得て、十七日長崎を立去つた。奉行松平康英は鎖國の實をあげ得なかつた責任を痛感して自刄した。

註2　RANALD MACDONALD

RANALD MACDONALD

文化六年二月、長崎の和蘭通詞のうち學才すぐれた者六名に對して、幕府は Jan Cock Blomhoff について英語の習學を命じ、六月には二名增加、八月更に六名追加、十月には通詞全部に習學を命じた。その時の記錄は、「阿蘭陀通詞共の內魯西亞語尼利亞言語稽古之義從江府依沙汰追々掛り雖被命蠻學の儀は幼年の頃より不學は氣憶も有之間數旨に付以來一統申談魯西亞語尼利亞言語兼學可致旨十月被命之」

又習學者氏名を各月別に示すに

二月——大通詞見習本木庄左衞門、小通詞末永甚左衞門、同格馬場爲八郎、小通詞並西吉右衞門、同末席吉雄忠次郎、稽古通詞馬場佐十郎

六月——小通詞並岩瀨彌十郎、同末席吉雄六次郎

八月——小通詞並中山得十郎、同石橋助十郎、同末席名村茂三郎、稽古通詞志筑龍助、同茂土岐次郎、同本木庄八郎

十月——長崎通詞全部

註3

Ranald MacDonald は、オレゴン州（當時はまだ英領であつた）コロンビア河口の Astoria（後の Fort George）に生まれ、父は Archibald MacDonald と云い、エヂンバラ出身、當時ハドソン灣商會の社員で仲買人頭をして居た。此の職にあゝ者は土地のインデイアンの娘と結婚する風習があつたので、父も Chinook 族酋長の娘 Princess Sunday と結婚したが、彼の女は Ranald の生後數ヶ月で死亡した。

註4

異國人所持之品左之通

一、小筒　壹挺

長サ四寸五分位口經三分位

一、橋船

但惣長サ四間半程

巾廣き所に而六尺位
深三尺餘

一、檣　壹本
長サ二間半程

一、帆　壹
但白木綿

一、櫂　壹挺

一、揖柄樣之物　壹
但長サ五尺位

一、綱
內長サ五尋程　壹本
長サ六尋程　壹本

一、碇樣之物　壹

一、碇浮樣之物　壹

一、水樽　貳

一、衣類品々入袋　壹

一、樽　壹
內獸肉樣之物有之

一、表紙付書物　大小廿三册

一、無表紙書物　拾五册

一、書物類取合　壹揃

一、萬國繪圖面　壹枚

一、天眼鏡樣之物箱入　壹

RANALD MACDONALD

RANALD MACDONALD

一、革笠　壹蓋
一、剃刀樣之物　壹
一、小刀樣之物　壹
一、火打樣之物　壹
一、丸のみ樣之物　大小貳本
一、釘拔樣之物　壹
一、鋒樣之物　壹本
一、藥罐蓋樣之物　壹
一、銀象眼蓋付壺樣之物　壹
一、銅柄拶樣之物　壹
一、錐樣之物　壹
一、櫛拂樣之物　壹
一、漉櫛樣之物　壹
一、白木綿糸　貳玉
一、牙樣之物　壹
一、硫黃　壹包
一、松やに　大小貳玉
一、ちゃん　壹玉
一、たばこ　少々
一、眼鏡樣之物　壹
一、銀色燭台樣之物　壹
一、小箱　壹
但錠前附

一、塗板　　壹枚
一、蓙樣之物　　壹枚
一、實子箒樣之物　　壹本
一、革沓　　壹足
右之通御座候　　以上

註5

John Finch を船長とする捕鯨船號 Lagoda 號から十五名の船員が脱走して、松前領江良町に漂着、難破を裝つて上陸したものゝ如くて、從つて母船は津輕海峽附近で難破したように傳えられて居るが、Lagoda 號は一八四六年八月二十五日捕鯨の途に就き、一八五〇年四月二十四日に無事歸航している（Alexander Starbuck: History of the American Whale Fishery, etc.）

註6

これについては彼等を本國に連戻すために長崎港を訪れた Preble 號の乘組員に Lagoda 號船員が色々の報告をしたものと見え、Preble 號歸國と共に米國内に相當の論議がなされた模樣で、Senate Documents, 32 Cong., 1 sess., No.59 には次ぎの如く記錄されて居る。

The narrative of the imprisonment of these unhappy mariners shows the cruelty of the Japanese Government, and the necessity of making some arrangement with it, involving the better usage of those who are cast upon its shores.

然しこれに關するマクドナルドの手記は正に日本側記錄と合致するものゝ樣である。

The Lagoda seamen were all young, violent, habitually quarreled among themselves, and gave much trouble …… All this time, and throughout their whole detention —— a period of twelve

RANALD MACDONALD

RANALD MACDONALD

months —— they were according to their own account, well and certainly not cruelly treated; as prisoners, ever, however. No punishment was inflicted.

註7

一、モツクル事八月六日夜より中暑之態相煩候付藥用手當申付置候處追て復せし免候
一、マコイ事同月十九日より腹痛相煩候ニ付藥用いたさせ候處追て快復
一、モツクルホールマンナスチーモ右四人同日より風邪相煩候付藥用手當爲致候處追て快復
一、ヂヤンマルテン同日より熱氣發齒痛之由ニ付藥用手當爲致候處追て快復
一、マウイハイレム同月廿日より風邪相煩候ニ付藥用爲致候處追て快復
一、チョン十月朔日より熱氣有之腹中拘念等之煩ニ付藥用手當爲致候處追て快復
一、スチーモ同月四日より腫物相發候付藥用手當致候處追て快方いたし其後痰咳之由ニ付猶藥手當爲致候處追て快復
一、マウレ牢内にて十一月廿一日夜一同之者共熟睡いたし候後縊死いたし候由一同之者より申立ニ誠之子細相尋候處不存旨申立尤死骸片付立之儀ハ相願候ニ付埋方申付候
一、エスレホール十二月十六日より腫物相發付藥用爲致追て快復いたし候處エスレハ同月廿一日より風邪相煩ニ付猶又藥用手當申付置候處追々熱氣烈敷病氣次第差重り當正月元旦死去いたし候誠之一同より死骸取片付相願により埋方申付ル
一、ホイ正月五日より腹痛相煩ニ付藥用爲致候處追て快復
一、ヂヤンフール正月八日より逆上半面痰痛いたし候付藥用爲致候處追て快復
一、ヂヤンフール腫物相發候付藥用爲致候處追て快復
一、ビハル者三月十九日よりホール者三月廿四日より腫物相發候付當時藥用罷在ル
一、ハーレケークハ病氣も無之罷在
一、蝦夷リイシリ嶋江致漂着候ラナルドマクドナルド是又病氣も無之罷在右之者も所行書面之通リ有之候間其外致見聞候儀者勿論衣類其外まで手當いたし置遣候處御國法相背候段委細可相達事

四月朔日

註8

And further, they even, at my request, did violence to their religious prejudice against meat as food, so far as to give me pork every seventh day……

I was served with almost lordly state: with five or six waiters to attend on me at every meal —— four a day —— with special extra ceremony at my Sunday feast …… All these (to them) rarities 〔referring to bread, butter, and milk〕 they seemed to take a pleasure in procuring for me, and were effusively demonstrative in, most regularly, laying before me, with the appropriate table service of knife, fork, etc.

註9

As to the vowels there was no difficulty: They have all the full *ore rotundo* sound, and, are all pronounced, even the final *e* (oe).

They were well up in grammar, etc., especially Murayama; that is to say, they learned it readily from me. They were all very quick, and receptive. It was a pleasure to teach them.

The discussions as to signification and different applications of words were, at times, a little laborious, but, on the whole, satisfactory, by aid of the dictionaries, and my own natural aptitude in that way —— of which I had no idea till developed by the effort.

註10

マクドナルドに親しく接觸して習學の機會を與えられる迄の和蘭通詞の英語は、師匠が和蘭人であつたため、すべて和蘭語に等生して、發音も、解釋も、文字の書き方も、皆和蘭流に行われていた。文化八年出版の吾が國最初の英語書籍たる「諳厄利亞國語和解」をのぞいてみても其のことが明らかにされる。

RANALD MACDONALD

RANALD MACDONALD

Take care; you will catch cold.（テーキ　ケーレ；ユー　ウイル　ケッチコール）豫防せられよ、汝は風邪を感ぜん

Eat bread with your meat.（イート　ブレッド　ウジユール　ミート）汝食物に蒸餅を食せよ

Go to dance.（ゴ　ト　デンス）行て舞踊せよ

It is but one by my watch.（イト　イス　ビユット　ワン　ベイ　メイ　ワッチ）我が自鳴鐘に因れば只一時なり